

十和田フィルは文化の薫り高き市の象徴



十和田フィルハーモニー管弦楽団
初代事務局長

さとう みのる
佐藤 稔 さん

市民文化センター建設は、長年の市民の願ひでした。市には「単なる貸館ではなく文化を育てる場所にしたい」という意向がありました。その中で生まれたのが、オーケストラ設立の動きです。私は、演奏はできませんが、不治の病とされていた結核を患ったときにクラシック音楽に癒され、それ以来オーケストラが大好きです。また、1957（昭和32）年頃からオーケストラ設立につなげるための子どもの器楽アンサンブル「アンサンブル・ド・モアノ（仏語でスズメの合奏団）」の運営に携わっていましたが、子供らの成長と共に自然消滅してしまい、挫折感を覚えていました。だから、センターからオーケストラをつくるという呼び掛けがあった時には飛び付きましたね。

私が事務局に入り、まず動いたのは団員の確保でした。さまざまな所へ赴いてはしつこくオーケストラへの勧誘活動を続けました。初演奏の音楽祭で、開演前に会場の様子を見に行くと、ほぼ満席でした。驚いてホールから出ると初代館長の今純一郎さんとばったり会い、お互い何か言おうとしましたが、ひと言でも口を開いたら涙がこぼれそうだったので、目で語り合ったのを覚えています。十和田フィルは、「このまちにオーケストラを」という熱い思いと出会いが重なってできた奇跡の楽団。たくさんの人の希望が詰まっています。十和田フィルはこの十和田市の誇りです。

STORY 十和田にオーケストラの種をまいた人

市民文化センター開館、それが全ての始まり



十和田フィルハーモニー管弦楽団
コンサートミストレス*

いしかわ いずみ
石川 泉 さん

*演奏面でオーケストラを取りまとめる人

八戸市民フィルハーモニー交響楽団でコンサートミストレスを2年務め、市民文化センター開館の1986（昭和61）年4月に十和田に嫁いできました。私たちの結婚披露宴に、今館長が列席していたのが縁で、1988（昭和63）年にバイオリン教室の講師の依頼があり引き受けましたが、この教室がオーケストラの団員育成を目的に開設されたことと知ったのは後のことでした。十和田フィル設立と同じ頃、センターが八戸ジュニアオーケストラを招待してバイオリン教室の生徒と一緒に演奏するという企画がありました。その時、今館

長が生徒に「十和田にジュニアオーケストラを設立するときには、皆さんが中心となって頑張ってください」と話し、生徒たちが深くうなずいていたのをよく覚えていました。今、振り返って思うと、幸運な偶然が重なっていました。自分たちの文化を、自分たちの地域で育てたいと、活動の大きな器となるセンター建設に尽力した大勢の人々の存在。人口約6万人の都市に行政の支援でオーケストラを設立したこと。そして偶然にもそこに自分が居合わせ、活動が定着したことを心から幸せに思います。

新 音が磨く

「そこ遅いよ」「ここのピッチ（音程）合わないね」団員同士で声を掛け合います。10代から80代まで広い世代の人が集まるこのオーケストラには世代を超えて互いに言い合える関係性が見え、チームワークの良さが感じられます。ソロとは違い、大勢で一つの音楽を作り上げるオーケストラは「合わせる」という作業が必要です。しかし、それは自分の音楽性を殺して大勢に合わせるのではなく、一人一人が音楽を楽しみながら合わせることに意義があります。できなければ何回でも練習する、何回でも合わせる、大人も子どもも関係なく、一人の奏者が責任とプライドをもって音楽に向き合う姿がそこにはあります。



特集

未来につなぐハーモニー

十和田フィルハーモニー管弦楽団の軌跡

本市は過去に「文化不毛のまち」と言われた時代がありました。今年30周年を迎える市民文化センターで産声を上げたのが「十和田フィルハーモニー管弦楽団」。現在、市内では小・中学校、高校の吹奏楽の部活動が盛んに行われ学校教育の充実が図られていますが、同楽団は、市民参加型の生涯学習として26年の実績を誇り、市民文化を支えています。また、6万都市にオーケストラが3団体（※）あるのは稀で誇れることです。今号では、管弦楽を通して市民の心に潤いを与え、次世代を見据えて“育てる”活動を展開する同楽団の軌跡をたどりま

市

民待望の市民文化センターが1986（昭和61）年5月に開館。初代館長を始めとするセンター職員らは、市の方針として、地域の文化振興を目的に、オーケストラ、子ども劇団、少年少女合唱団、混声合唱団の育成団体設立に動き出します。

オーケストラをつくらう

開館まもなくセンターは、オーケストラの土台作りのため、バイオリン教室（後にチェロ教室も）を開講します。教室の生徒が上達してきた頃、オーケストラ設立の検討会議が始まりました。「無理だ」「いや、できる」、意見は二分し平行線をたどりま

「できるかできないか、一度音を出してみませんか」これが市民参加型の生涯学習の始まりでした。大ホールで、教室の生徒を中心とした、名もなきオーケストラが奏でた音は、「初めてと思えない美しさ」と、取材に来たマスコミから評されました。これを機にオーケストラ設立は夢から現実となり動き出します。センターは、団員募集の呼

び掛けを始めました。6万都市での人材確保は予想以上に難しかったといいますが、行政と市民が一丸となり、自分たちのまちにオーケストラをつくるという情熱で、人が人を呼び、やがて楽団の形が見えてきたのです。1990年10月、「十和田フィルハーモニー管弦楽団（以下・十和田フィル）」は、県内4番目の市民オーケストラとして産声を上げます。

記念すべき初演奏

翌年（1991年）、市民文化センター開館5周年記念音楽祭が十和田フィル公式の初演奏となりました。この音楽祭は、当時全国的にも類を見ない市民手づくりの音楽祭で、十和田フィルの演奏はこの音楽祭の華となりました。地元のホールで、地元のオーケストラが届ける生の音楽に、会場からは割れんばかりの拍手と喝采が沸き起こりました。奏者として参加していた川村現団長は「これこそが市民オーケストラのあるべき姿」と観客から絶賛されたことを今でも鮮やかに思い出すと語ります。

（※）十和田フィルハーモニー管弦楽団、ジュニアオーケストラ十和田、北里大学十和田交響楽団